

た。旧海軍航海科の技術を生かし海上に職を求め
る決心をし、その後、約六年間は千トン級の近海
航路の普通船員として勤務、昭和二十九年四月よ
り四年間に当時の運輸省所管の船舶職員再教育機
関「海技専門学校（海技大学校）」に入学、船舶
職員としての教育を受け、甲種船長免許（一級海
技士）の免許を受けました。

昭和三十三年より昭和六十一年の退職まで、多
くの船舶の航海士や船長を務めました。

特に昭和五十五年ごろまでの約八年間、十万吨
型タンカー「雄琴丸」の船長として勤務いたし、
私の約六十年に及ぶ長い長い航跡を終えましたが、
海上職を退職後は地域の福祉関係のお手伝いをさ
せて頂いて来ました。

最後に、兵歴は二年二カ月の短いものですが、
少年期の一時期を国の危機に捧げ得たことに悔い
はありません。ただ幼くして散華した多くの同期
生を思い、ご冥福を祈るばかりです。

航空母艦が魚雷で沈没

一晩中海を泳ぐ

福島県 鈴木末吉

私は昭和二（一九二七）年三月、福島県喜多方
町の農家の四男に生まれました。両親と兄が三人、
姉二人、妹二人の八人兄弟で、十人家族でした。
現在なら大家族と言われますが当時はどこの家庭
も同様に大勢おりました。

高等小学校を卒業してさらに農家を手伝いなが
ら町の学校へ一年通いました。日本の海軍と空軍
がハワイの真珠湾を奇襲攻撃して太平洋戦争が勃
発した昭和十六年には、私はまだ十四歳のときで
した。ラジオ放送は毎日「日本軍の連戦連勝」の
大本営発表のニュースで湧き立っておりまして。
そして昭和十八年、アメリカ軍の反撃によってだ
んだん戦況雲行きが怪しくなってきたのも知らず
に、私は十六歳で横須賀海兵団に入団を志願しま

した。

昭和十八年九月四日、喜多方駅から家族や親族と地域の婦人会の方々など大勢の見送りを受けて汽車に乗りました。喜多方町からは私を含めて四人でした。兄たち三人は既に軍隊に行っており、農家の我が家では間もなく稲刈りが始まる時期で、人手がなくなるのが心配でしたが、姉二人、妹二人が家におりましたので、銃後を任せる形で安心して出発しました。

入団してからの教育は、毎日水泳とボート漕ぎの練習でした。血気盛りの若者たちでしたが、手のひらに豆が出来、それが破れて膿を漕ぐのに苦労しました。水泳もただ泳ぐばかりで無く、長時間水の上に浮く練習やスピードを出して目的地へ早く到着する訓練、さらに水に潜って何分いられるかなどの厳しい訓練を二カ月もさせられてから、今度は機雷学校へ派遣されました。ここでは軍艦から機雷の発射訓練を毎日させられました。

昭和十九年四月、広島島の呉軍港へ転属となり、

航空母艦「海鷹」の乗組員となりました。改装航空母艦か最初から航空母艦として進水したのか私には分かりませんが、とにかく航空母艦に勤務しました。甲板洗などの作業は一般海軍の勤務と同じでした。

四月下旬ごろ、商船や貨物船など数隻の船団を組んでフィリピンのマニラへ向けて呉港を出航しました。私たちの空母は、この船団護衛が任務でしたが、既に当時の制海権はほとんど敵の掌中にあるため中国大陸沿いに南下し、敵潜水艦を警戒しながら台湾の高雄港へ寄港、ここで三日間ほど荷物の積み下ろしを済ませてからバシー海峡をマニラに向けて出航しました。

船体が大きい故かあまり揺れないので船酔いはありませんでした。幸い敵に遭遇することもなくマニラへ入港しました。ここで五日間ぐらい荷物の積み降しを行い、帰りも台湾経由で呉港へ無事帰港しました。

一週間ぐらいして再び南方目指して出航し、今

度はシンガポールへ向いました。護衛の駆逐艦などの姿はなかったように思いますが、同じようなコースを何回も行き来して種々の物資を呉港を母港として輸送する船団の護衛の任務を遂行していました。

昭和二十年七月半ば、いつも通りマニラへ行つての帰りでしたが、九州沖まで来た時に運悪く敵空軍（ほんの五、六機）に発見され、加えて敵潜水艦も現われて海と空からの攻撃を受けました。

「海鷹」はジグザグに逃げながら呉を目指しましたが、敵は我が航母に集中攻撃し、遂に魚雷をかまし切れず命中、大音響と共に傾きました。

我々は次々に海へ飛び込みました。幸い敵機からの機銃掃射も無く、我々は陸地を目指して懸命に泳ぎました。夜になつても助け船は現れず、仕方なく暗い海をただ泳ぐだけでした。体力の消耗をできるだけ少なくして「こんな所で死んでたまるか」との信念で夜明けを待ちながら一生懸命泳ぎました。何につかまって泳いでいたのか全く覚

えていませんが、横須賀での訓練の成果が現れ、皆一晚中泳ぎました。

翌朝、日が昇ってから民間の商船が助けに来てくれました。「貴様らの命を救うための訓練だ。弱音を吐くな」と怒鳴られながらの訓練のお陰で本当に全員が助かったのです。

商船に収容されて別府へ上陸、別府市では高等女学校が我々の兵舎となりました。ここで一カ月くらい居候し、全員、横須賀海兵団へ帰ることになり、別府駅から汽車に乗ったのが奇しくも昭和二十年八月十五日の朝でした。

途中、駅で午後から乗って来た乗客が「兵隊さん残念ながら戦争は日本が負けてしまったね、でも終わってよかったよ」と言うので聞きますと、天皇陛下の玉音放送があったと知らされて終戦を知りました。何かほっとした気分になりました。これでこの汽車も爆撃される心配も無く横須賀へ帰れるのだと安心しました。

思い出せばあの時はまだ十八歳、今なら高校三

年生だから考えも単純でした。海兵団へ帰団したものの何の指示も命令もなく、八月三十日に、皆は家へ帰ることになり、横須賀駅から故郷へ向けて汽車に乗りました。入団するとき喜多方駅から四人一緒に汽車に乗ったが、入隊した部隊も別なのか、その後の事は分かりません。あるとき私は十六歳でほかの方とは年齢差があり、同じ町の方でしたが名前も知らなかったのです。

二年ぶりに懐かしい我が家へ帰りますと、「国破れて山河あり」故郷の田舎町は爆撃も受けずに無事でほっとしました。家族も変わり無く元気でしたが、長兄が満州で、次兄が朝鮮からマニラへ転戦、三男はインド方面に出征したとのことで兄たち三人はまだ復員していませんでした。

帰宅したときは農閑期でしたのでしばらくのんびりしていましたが、間もなく秋の採り入れが始まり、父母や姉妹たちと毎日忙しく働きました。二年たち三年と過ぎる中に兄たちも順次復員して来ました。長兄は復員して公務員に、次兄は戦前

満州鉄道に勤務しておりましたので日本の国鉄に、三男の兄も船員になってそれぞれ独立して家を出て行きました。

それで最後に残された四男の私が両親のあとを継ぐことになって、家の農業をしました。二人の姉も、妹二人も嫁に行き、農家の働き手が足りなくなつて昭和二十四年七月、私も隣村から嫁を迎えました。

私は農業をしながら村の農業協同組合に勤務、農協を退職後はタクシーの運転手を十四年勤めました。その間に調理師の資格を取り、平成二（一九九〇）年、合併して市になった喜多方市内に飲食店を開業し、家督は長男夫婦に譲り、私たちが夫婦は飲食店を経営しております。子供は長男と娘三人の四人で皆独立しております。

喜多方市は観光地として五色沼、松原湖があり、また喜多方ラーメンが有名です。私は飲食店を経営しながら毎朝、健康と趣味を兼ねて二時間畑に出て働き、春は山菜を、秋はキノコを求めて山へ

登り、平和になった世の中に感謝しながら余生を
妻と二人で楽しく過しております。

海軍機雷学校生として

群馬県 阿部 精

私は昭和三（一九二八）年七月十九日、代々下駄屋を商んでいた阿部家の六人兄弟の次男として生まれました。

昭和十八年ともなると戦争はますます拡大しており、私たち子供も、毎日が戦争ごっこ遊びであつた。

昭和十八年三月、古馬牧南国民学校を卒業して家業の下駄材料等の仕事を手伝っていたが、五月十八日、海軍志願が合格して横須賀第一海兵団に入団することとなった。当時男子の若者のほとんどが軍隊を志望した時代でした。

私は海軍機雷学校を志望して第十期普通科水測術練習生として八カ月間の教育を受け、特に電波探知機による電波信号教育の訓練を受けた。少しでも信号が間違つたりすると、「海軍精神注入棒」